

【特別招待講演1】 第1席 「『黄帝内経太素』の成立について」

中国・北京 錢超塵

十九世紀前半に日本で発見された楊上善の『黄帝内経太素』は、『内経』経文の古態が保存されており、その原初形態を考察する上で計り知れない意義をもっている。また、断片でしか伝わっていない全元起注を除けば『内経』に関する現存最古の注釈でもある。以上のような意味から、今日、『太素』が『内経』の校勘と研究のための一級資料であることは、日中の共通の認識となっている。

この様に重要な意味を持つ文献であるにもかかわらず、その成立、内容、位置づけなどについては、中国・日本ともに多くの議論があり、現在でも確たる定説がをいのが実情である。これらの問題の解決には、訓詁、音韻、語法その他の様々な方面から経文を検討解析していくことが不可欠である。また注釈の面では、道教、仏教などの影響についても注目する必要がある。

よって特別招待講演1では、以下のような点をふまえて、錢超塵先生の『太素』についてのお考えをおうかがいする予定である。

- ①『太素』の内容からみた成書年代、及び著者・楊上善の生没時期
- ②『漢書』芸文志所引の『黄帝泰素』との関係
- ③原型としての『素問』『靈樞』『甲乙経』の成立と『太素』との関係
- ④『太素』経文の語言的特徴（全元起注本、王冰注本の経文との比較において）
- ⑤楊上善注本『太素』の構成
- ⑥楊上善注について
 - A. 楊上善注の医経研究史上の意義
 - B. 楊上善の思想（医学思想を吊む）
 - C. 『太素』楊上善注における訓詁、音韻（釈音）、語法の特徴と問題（全元起注、王冰注との比較）

(文責：篠原)